

義務教育学校通信

令和8年7月1日(水)

【編集】役場プロジェクトチーム

【発行】鮫川村教育委員会

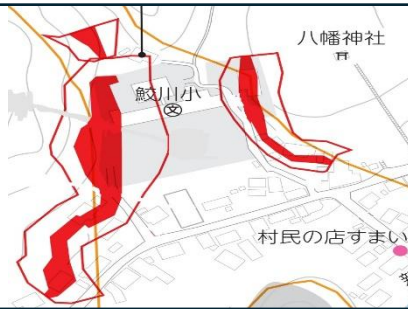
【電話】0247-49-3151

なぜ学校を新しく建てるの？

村では現在、令和11年度開校を目指して義務教育学校の建設を進めています。しかし、なぜ義務教育学校が必要なのかという声をよく耳にします。村民の皆さんにしっかりと伝えできていない現状を鑑み、今後は「義務教育学校通信」で村の計画を村民の皆さんにお伝えしたいと考えています。

鮫川小学校の現状

現在の鮫川小学校の周辺は、土砂災害特別警戒区域に指定されています。これは、小学校を建設した当初は特に問題視されていませんでした。しかし、近年の豪雨災害や浸水被害で、改めてその危険性が問題視されています。「これまでは大丈夫だったんだから…」という常識が覆された被害が全国で頻発している今、この鮫川村で悲劇を起こさないために、早急な対策が求められています。



※土砂災害特別警戒区域とは？

がけ崩れや土石流、地すべりなどが発生した場合に、建物が破壊され、住民に大きな被害が生じる恐れがある区域。県が調査を実施して指定しています。

鮫川中学校の現状

鮫川中学校の校舎は、昭和46年に建築され「耐用年数」とされている60年に近づいています。

これまでも修繕などを行ってきましたが、老朽化が進み、生徒たちは必ずしも快適に過ごせているとは言えません。小さな村であっても子どもたちは等しく教育を受け、十分な学習環境を得る権利があり、それを担保することが村の務めです。



小中一貫教育の実現

上記のとおり、小学校・中学校ともに現在の校舎には問題を抱えており、できるだけ早くその問題を解決しなければなりません。加えて、小中一貫校の実現は児童・生徒にとってたくさんのメリットがあり、村財政にとっても別々に整備・管理するよりも負担を軽減することができそうです。どうか皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

次号では、こどもセンターの段階整備や財政面についてお知らせします。

また、これまでの経緯などについては左のQRコードからご覧ください。



村ホームページ
義務教育学校等整備

村長、魂の叫び！！

今、全国的に校舎の老朽化に伴い外壁や天井の一部落下により、子どもや職員が怪我をする事故が繰り返し発生しております。

本村におきましても、小学校、中学校の老朽化が進み、安全で安心して学べる教育環境の整備は喫緊の課題であり、行政の責務でもあります。そのための義務

教育学校の建設計画であり、子どもたちの生命を最優先に考えた建設計画であります。

次代を担う子どもたちがこの豊かな里山景観に包まれ、自然に触れることによる心豊かな感性と学力が育まれる学校づくりと、現在村が進めております有機栽培による安全・安心な食材の提供により、健やかな成長を促していきたいと思っております。そして子どもたちにとって人生の中で一番楽しくかけがえのないこの時期、たくさんの思い出と将来の夢の土台を作れるよう、誰もが学校に行きたいと思っただけの教育環境の整備を、地域住民の皆様のご理解を得ながら、学校、保護者、行政が三位一体となって進めて参りますので、よろしくお願いいたします。

鮫川村長 宗田 雅之

校長先生に意見をいただきました！

鮫川村立義務教育学校の設立に向けて 鮫川村立鮫川中学校長 小野里高広

私は、平成3年からの4年間を教員生活2校目の勤務校として鮫川中学校に在籍していました。現在2度目の本校勤務を役職も変わって務めていると、大きな変化の中でこそ見えてくることがあります。1度目勤務の当時は学年に2または3学級あり、全校生徒数は250人を超え、6つの小学校学区から集まっていたのでそれぞれの出身小学校の特質を持った集団の雰囲気もあって、現在と比べると随分と活気があったように思い出されます。現在は、村の人口も当時の半分程になり、全校生徒数は55人となってしまいました。小学校でも同様に各学年単学級となつていますが、こどもセンターの在籍状況や村の出生数を追うと、近い将来複式学級編成も視野に入れた学校経営も余儀なくされるようです。このような児童生徒数の状況にあつては、小学校と中学校を併せた義務教育学校の設立を想定するのは当然の帰結であると思われま

す。加えて、鮫川小学校が土石流警戒区域にある事実や鮫川中学校校舎の耐用年数の限界が3年後に迫っている事態も踏まえると、小学生と中学生に新たな学習の場を提供することは急務であるとも言えます。

義務教育学校は、ただ単に小学校と中学校を一つに併せるという意味合いだけでなく、以下のような教育効果を生み出すこと

が期待されています。

例えば、いわゆる中1ギャップの解消です。これは、入学したばかりの中学1年生が小学校と大きく変わる学習内容や生活スタイルに戸惑って心身の不調を発生させる問題を避けることができるということです。また、カリキュラム編成を工夫し教員の交流を進めることで、小学校から始まる英語教育を充実させ学力の向上につながることも可能になります。私が校長を務めるのなら、数学と英語の学力向上を標榜する学校経営をしたいと考えています。さらに、現在村の義務教育学校建設計画が実現すれば、中学生によるひだまり荘や児童クラブでのボランティア活動を推奨します。心豊かな子ども達を育てる大変貴重な機会となりますし、高齢社会や出生率の問題などについて考える子ども達が増えていくことにもつながるのではないのでしょうか。

村民のみなさんを始め、義務教育学校を取り巻く多くの方々が新しい学校づくりに向き合つて、共通理解のもと「鮫川ならではの夢のある教育の実現のために協力を続けていってほしいと願っています。



鮫川中学校
小野里校長先生

子どもたちの未来を地域とともに
義務教育学校が

もたらす新しい学び

鮫川村立

鮫川小学校長 丹内哲史

地域の皆さま、いつも本校の教育活動に温かいご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

現在、鮫川村では、小学校と中学校の学びを一つにつなぐ「義務教育学校」の建設に向けた準備が進められています。「これまでの学校と何が変わるのだろうか」と期待や不安を感じている方も多いのではないのでしょうか。そこで、小学校長の立場から、この新しい学校が持つ可能性についてお伝えいたします。

一番の大きな変化は、「9年間の切れ目のない成長支援」です。これまで、中学校への進学時に環境の変化に戸惑う「中1ギャップ」が課題とされてきました。新しい学校では、義務教育の9年間を一貫した見通しのもとで教育できるため、子どもたちが環境の変化に煩わされることなく、安心してのびのびと学習活動が展開されます。

また、小学校高学年から中学校の専門教科の先生による授業を導入しやすくなり、より深い学びが可能になります。

日常的に中学生を手本にすることで、小学生の自立心が自然と育まれるのも大きなメリットです。もちろん、通学路の安全確保や、異年齢の生活における安全面については、現在も関係機関と慎重に協議を重ね、万全の対策を進めています。

そして、新しい学校は「地域とともにある学校」を目指しています。皆さまがこれまで築いてくださった「地域で子どもを育てる」という伝統を受け継ぎながら、地域の皆さまが集い、子どもと世代を超えて交流できる、村の新たな拠点にできると考えています。

校舎の形は変わっても、地域の子どもたちを想う私たちの心は変わりません。子どもたちがこの村に誇りを持ち、未来へ健やかに羽ばたいていけるよう、最善の環境を整えてまいります。皆さまの温かいご期待と、変わらぬお力添えをお願い申し上げます。



鮫川小学校
丹内校長先生